

I 研究の概要

1 研究主題

「児童の主体性と個性を生かした自己肯定感の育成」

～海洋教育における対話的活動の工夫を通して～

2 主題設定理由

本校では、令和4年度から「児童の主体性と個性を生かした自己肯定感の育成」をテーマに海洋教育における表現活動の工夫について研究を進めてきた。新型コロナウイルス感染症による臨時休業が相次ぎ、計画していた取り組みの見直しや中止を余儀なくされてしまった中でも、教材に工夫を重ね、地域の方々と協働した地域資源を活用した探求学習やICTを活用した他県児童生徒とのオンライン交流学习など、新たな学びの可能性を発掘してきているところである。昨年度の研究を通して、以下の3つの成果が見られた。

- ①身近な自然や文化的資材，地域人材を活用して，体験的・探究的活動を取り入れることで，児童が主体的に学習することができた。
- ②自分や町，身近な自然（海）の良さに気づき，それらを守ろうとする意欲を高めることができた。また，海の課題（環境問題）について向き合い，解決方法を考えようとする主体的な態度が見られた。
- ③ICTを活用し，学習したことを作品に表したり，グループで協力してまとめ，工夫して表現（発表）したりして交流することで，児童同士で認め合い，達成感を味わい，自己肯定感の高まりが見られた。

しかし、「自己肯定感の高まりを図る（見取る）ための工夫」、「児童が自発的に探究活動できるような手だて」、「主体性を生かした表現方法の工夫」の3つの課題が残った。

そこで本年度は、児童の自己肯定感をさらに高めるために、昨年度の課題から児童が自発的に探究活動に取り組むことができるよう活動の場の工夫を図る。その場を工夫する中で、児童対教材、児童対友達など、対話の対象を意図的に設定（対話的活動の工夫）することで、主体性や個性が生かされた学びの表現ができるのではないかと考える。また、その中で自分の良さや自己の成長に気づき、自分に自信を持つことで、児童の主体性と個性を生かした自己肯定感の育成ができるであろうと考え、本研究テーマを設定した。

3 研究仮説

海洋教育における体験活動や探究活動，表現活動の場において，対話的活動の工夫を通して，児童が認められる場を意図的に設定することで，自分の良さや自己の成長（変容）に気づき，児童の自己肯定感が高まるであろう。

4 研究方法

- (1) 理論研究（資料・講話等）
- (2) 授業研究・実践（学年研究，全体授業研究会）
- (3) 校外研修報告等

5 テーマの捉え方

(1)「海洋教育」とは(2021年度海洋教育パイオニアスクールプログラム 糸満市教育委員会より)

海洋教育は「海洋と人との共生」という大きな課題に向かい、その実現に向けて必要な知識や技能を身に付け、行動できるような人材の育成を目指す。

①海洋教育の定義

人類は、海洋からただいなる恩恵を受けるとともに、海洋環境に少なからぬ影響を与えており、海洋と人類の共生は国民的な重要課題である。海洋教育は、海洋と人間の関係についての国民の理解を深めるとともに、海洋環境の保全を図りつつ、国際的な理解に立った平和的かつ持続可能な海洋の開発と利用を可能とする知識、技能、思考力、判断力、表現力を有する人材の育成を目指すものである。この目的を達成するために、海洋教育は海に親しみ、海を知り、海を守り、海を利用する学習を推進する。

②海洋教育の4つのキーワードについて

海洋教育では「海に親しむ」ことから始まり、「海を知る」ことで海への関心を高めさらに海と人との共生のために「海を利用」しながら「海を守る」ことの大切さを学んでいく。

ア【海に親しむ】

海の豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な体験活動を通して、海に対する豊かな感受性や海に対する関心等を培い、海の自然に親しみ、海に進んでかかわろうとする児童生徒を育成する。

イ【海を知る】

海の自然や資源、人との深いかわりについて関心を持ち、進んで調べようとする児童・生徒を育成する。

ウ【海を守る】

海の環境について調べる活動や保全活動などの体験を通して海の環境保全に主体的にかかわろうとする児童・生徒を育成する。

エ【海を利用する】

水産物や資源、船舶を用いた人や物の輸送、また海を通した世界の人々との結びつきについて理解し、それらを持続的に利用することの大切さを理解できる児童・生徒を育成する。

(2)「自己肯定感を高める」とは

「自己肯定感」の捉え方 (「文科省 第十次提言」より)

勉強やスポーツ等を通じて他者と競い合うなど、自らの力の向上に向けて努力することで得られる達成感や他者からの評価等を通じて育まれる自己肯定感と、自らのアイデンティティに目を向け、自分の長所のみならず短所を含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで身に付けられる自己肯定感の二つの側面から捉えること。

自己肯定感を高めるためには、他者との協働（グループ活動や異学年交流，児童会活動，職業体験や社会奉仕活動等，地域と関わりながら学ぶ体験活動など）の中で子どもたちが自分の役割を果たすとともに，子どもたちが集団または個人の目標を達成した際に，周りの大人や子どもたち同士がその役割を認めることで成功体験を感じさせることが大切である。そしてその成功体験を感じさせるという一連の取り組みを継続的に行うことで自己肯定感が高まると示されている。

また，文科省のデータ分析によると，学校生活においては，学級やグループでの課題を自ら設定し自ら考え，自分から取り組むなどの主体的な学びや友達との話し合いなどの他者との協働を行っているという回答した子どもたちの方が，「挑戦心」，「達成感」，「規範意識」，「自己有用感」の意識が高くなっていると示されている。

先生との関係においては「先生が良いところを認めてくれる」と感じている子ども達の方が「自己有用感」に関する意識が高くなっている。このような関係を作るためには，次の4つのことが重要である。

- ①子どもの「個」を尊重しつつも，子どもたちが自己と他者を区別し，自分が社会の一員であることを認識できるようにすること。
- ②社会には多様な価値観があることを大人自身がしっかりと認識した上で，子どもの発達段階に応じて接すること。
- ③自己肯定感が人との関わりを通じて形成されることを踏まえ，保護者や教師をはじめとした子どもに関わる全ての大人が自身も自己肯定感を持って子どもと接すること。
- ④大人が様々な場面で，子どもの良いところを褒めたり認めてあげたりすること。
- ⑤良いところは積極的に褒め，叱るべきところでは叱るなど，大人が愛情を持って積極的に関与し続ける姿勢を示すこと。

これらのことをまとめると，子どもの自己肯定感を高めるためには，以下のことが必要になる。

「自己肯定感を高める」ために

【児童】

- ・自己存在感を持つ
- ・自己有用感を持つ
- ・集団の中での存在意義を持つ
- ・満足感，達成感を得る
- ・自分の成長に気づく
- ・自分らしさを発揮する（自信を持つ，自分の長所と短所を受け入れる）
- ・チャレンジして，自分を高めていこうとする

【教師】

- ・共感的人間関係の構築
- ・支持的風土づくり（ほめる・認める）
- ・学習規律の確立
- ・教師も自己肯定感を持って児童と接する
- ・異学年交流の充実
- ・児童会活動の充実
- ・体験活動の充実

(3) 「主体性と個性」を生かすとは

主体性 → 主体的な学び・アクティブラーニング

「主体的な学び」の視点 (総合的な学習の時間 学習指導要領解説より)

児童自ら課題を見つけ、考え、判断し、探究活動に取り組む。

学習後に自らの学びの成果や過程を振り返ることを通して、次の学びに主体的に取り組む態度を育む学び。

総合的な学習の時間においては、学習したことをまとめて表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく過程を重視している。

児童が主体的に学んでいく上では、課題設定と振り返りが重要となる。

【課題設定】

児童の学習課題の設定においては、実社会や実生活の問題を取り上げることが重要である。また、学習活動の見通しを明らかにし、学習活動のゴールとそこに至るまでの道筋を鮮明に描くことができるような学習活動の設定を行うことが必要となる。

【振り返り】

振り返りを行うことで、自らの学びを意味づけたり、価値づけたりして自覚し、他者と共有していくことにつながる。

学習活動を振り返り、体験したことと収集した情報や既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理すると深い理解につながっていく。なお、振り返りは必ずしも単元の最後に行うとは限らない。探究の過程において、途中で一旦立ち止まって振り返って考え直してみるということも、主体的な学びという視点からは意義がある。

【個性を生かす】(総合的な学習の時間 学習指導要領解説より)

協働的な学びは、個性を生かすことでもある。「個性を生かす」＝「協働的な学び」

【協働的な学び】(総合的な学習の時間 学習指導要領解説より)

多様な情報に触れ、その後の整理や分析を質的に高める。

異なる視点から検討する。

地域の人と交流したり、友達と一緒に学習したりすることが相手意識を生み出したり、学習のパートナーとしての仲間意識を生み出したりする。

具体的な場面

- (1) 多様な情報を活用して協働的に学ぶ
- (2) 異なる視点から考え協働的に学ぶ
- (3) 力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ
- (4) 主体的かつ協働的に学ぶ

協働的に学ぶことにより、探究的な学習として、児童の学習の質を高める。

(4) 対話的活動の工夫 (場の設定) とは

【対話的な学び】(教育課程説明会 アクティブラーニングの視点からの授業改善資料 文部科学省)

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自己の考えを広げ深めるような学び。

対話的活動の工夫

児童対教材, 児童対友達, 児童対自分, 児童対教師, 児童対地域人材との交流の場を設定し, 児童同士で認め合ったり, 教師が評価したりすることで, 自己の良さや成長に気づかせ, 自信を持たせ, 自己肯定感を高めていく。

総合的な学習の時間では, 他者とともに探究的な学習に取り組むことを大切にしてきたように, 探究的な学習の過程を質的に高めていくためには, 引き続き異なる多様な他者と力を合わせて課題の解決に向かうことが欠かせない。ここで行われる異なる多様な他者と対話することには, 次の三つの価値が考えられる。一つは, 他者への説明による情報としての知識や技能の構造化である。児童は身に付けた知識や技能を使って相手に説明して話すことで, つながりのある構造化された情報へと変容させていく。二つは, 他者からの多様な情報収集である。多様な情報が他者から供給されることで, 構造化は質的に高まるものと考えられる。三つは, 他者とともに新たな知を創造する場の構築と課題解決に向けた行動化への期待などである。

また, 「対話的な学び」は, 学校内において他の児童と活動を共にするというだけでなく, 一人でじっくりと自己の中で対話すること, 先人の考えなどと文献で対話すること, 離れた場所を ICT 機器などでつないで対話することなど, 様々な対話の姿が考えられる。

6 研究構想図

児童の主体性と個性を生かした自己肯定感の育成
～ 海洋教育における対話的活動を通して ～

海洋教育

【海洋教育の定義】

人類は、海洋からたゞいなる恩恵を受けるとともに、海洋環境に少なからぬ影響を与えており、海洋と人類の共生は国民的な重要課題である。海洋教育は、海洋と人間の関係についての国民の理解を深めるとともに、海洋の海洋教育の保全を図りつつ、国際的な理解に立った平和的かつ持続可能な海洋の開発と利用を可能にする知識、技能、思考力、判断力、表現力を有する人材の育成を目指すものである。この目的を達成するために、海洋教育は海に親しみ、海を知り、海を守り、海を利用する学習を推進する。

【海に親しむ】

海の豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な体験活動を通して、海に対する豊かな感受性や海に対する関心等を培い、海に親しみ、海に進んでかかわろうとする児童生徒を育成する。

【海を知る】

海の自然や資源、人との深いかかわりについて関心を持ち、進んで調べようとする児童・生徒を育成する。

【海を守る】

海の環境について調べる活動や保全活動などの体験を通して海の環境保全に主体的にかかわろうとする児童・生徒を育成する。

【海を利用する】

水産物や資源、船舶を用いた人や物の輸送、また海を通じた世界の人々との結びつきについて理解し、それらを持続的に利用することの大切さを理解できる児童・生徒を育成する。

【主体性】

児童自ら課題を見つけ、考え、判断し、探究活動に取り組む。

【個性】

自ら見つけた課題について、学んだことや体験したことをまとめ、自らの言葉や絵、作品等を通して表現する。

対話的活動

【自己肯定感】

児童
・自己存在感を持つ。・自己有用感持つ。
・集団の中での存在意義を持つ。
・満足感・達成感を得る。
・お互いに認め合う。
・自分の成長に気づく。
教師
・共感的人間関係を構築する。
・支持的風土をつくる。

【対話的活動】

・児童が教材や自分、友達、先生、地域人材と対話し、認め合う活動

☆ 主体性と個性を生かした対話的活動を通して、自己肯定感を高める。

本校の海洋教育の目標

①身近にある糸満の海を知り、親しみ、守り、利用するために、産業や伝統・文化に目を向け、調査・体験をする。
②課題を見つけ、解決方法や自分にできることを考え、発信する。

【低学年：目標】

①身近な海の自然に触れる体験や知る活動を通し、海に進んで関わろうとする態度を育む。
②身近な海について体験したことや知ったこと、感じたことを伝え合う。

【低学年：手だて】

糸満の海について調べたり体験したりする。
海の自然物を利用した作品作りを通して、わかったことや感じたことを発表する。

【3学年：目標】

干潟観察や海人工房見学などの多様な体験・探究活動を通して、糸満の海について知り、進んで調べたりそれを相手に伝えたりする。

【3学年：手だて】

身近な糸満の干潟観察や海人工房見学、講話などを通して、課題を見つけ、調べ学習を進める。
相手意識をもって調べたことをまとめ、発表する。

【4学年：目標】

身近にある糸満の海を知り、海に親しみ、海を守り、調査・体験したことから課題を見つけ、解決方法や自分にできることを考え、発信（表現）する。

【4学年：手だて】

①糸満の海岸（南浜公園）を散策し、海の生き物の環境を調査する。
②課題を見つけ、海の環境問題について考え、自分達にできることをまとめて発表する。

【5学年：目標】

海と環境と人との関わりについて調べたこと体験したことをまとめ、伝えたいことを工夫して発表できる。

【5学年：手だて】

①糸満の海の環境と人との関わりについて調べたり体験したりする。
②課題を解決するために考えたことや伝えたいことを工夫して発表する。（報告する）

【6学年：目標】

県内・市内の海に関係する仕事を調べ体験し、学んだことを自分の力で発信することができる。

【6学年：手だて】

海の仕事について、講師を招いて体験談を聞き、実際に自分たちで調べ課題を見つける。
マリンスポーツを体験したり、地域の海岸を散策したり、気づき学んだことを工夫しながら発表につなげる。

段階①：知る 1学期
(主体性と個性を生かす)

○教師の手だて
・児童が自らの課題を見つけ主体的に動くための教材や体験活動を吟味する。活動計画を立てる。
○児童の活動
・自分のテーマを見つける。
・課題解決に向けての探求活動を行う。(調べ学習、体験学習)

段階②：学び合う 2学期
(他者との関わりをもつ) (比べる)

○教師の手だて
・地域人材の活用。
・振り返り活動の充実。
○児童の活動
・課題解決に向けての探求活動を行う。(調べ学習、体験学習)
・学んだこと伝え合う。

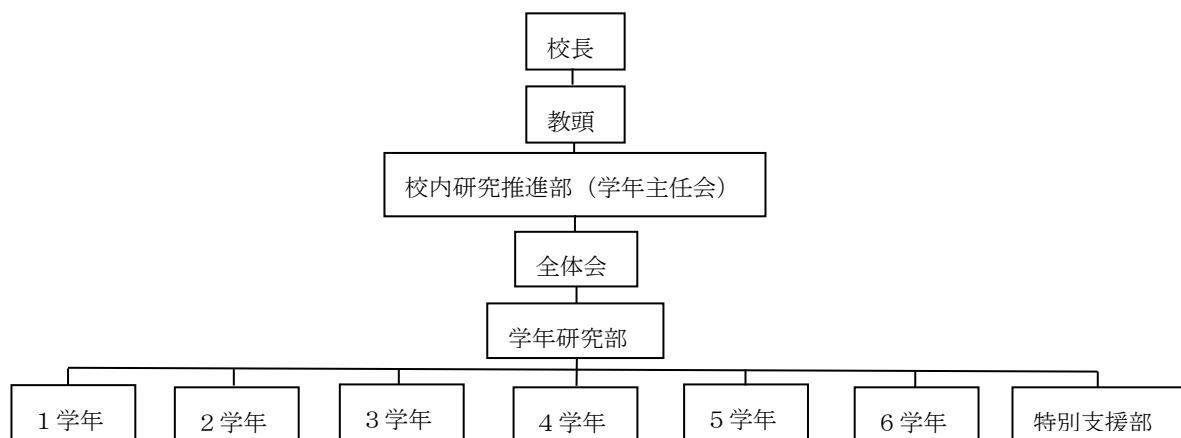
段階③：深め合う 3学期
(表現する)

○教師の手だて
・相手を意識した発表の場面作り。
○児童の活動
・学んだこと、体験したことをまとめ、発表する。(新聞、プレゼンテーションソフト、絵、工作、歌等)

7 糸満南小学校 研究計画

月	日	曜	研修内容	形態
4/6	～	7/20	教材研究 1人1授業公開（授業参観）	全体 学年（個人）
4	4	月	取り組みの共通理解	職員会議
5			児童アンケート調査1回目（5月中）	
6	6	火	心肺蘇生法, AED 使用実技講習 糸満消防	全体
7	25	火	特別支援・生徒指導研修	全体
	26	水	道徳研修「考え・議論する道徳授業のつくり方」	
			体育研修「体づくり運動」	
			ICT「ロイロノートの使い方」	
27	木	海洋教育 理論・実践		
8	21	月	幼児教育施設保育参観合同研修会	
	22	火	糸満中校区合同研修会	
8/25	～	12/25	教材研究 1人1授業公開（授業参観）	全体 学年 個人
9	1	金	2学期の実践の共通理解	全体
	25	月	道徳研修「評価について」	全体
	27	水	全体授業研究会① 代表6学年	全体
12			児童アンケート調査2回目（12月中）	
	13	水	全体授業研究会② 代表2学年	全体
1	12	金	糸満市教育の日（授業参観・学習発表）	全体
	19	金	授業実践の振り返り（校内研まとめ）	学年・全体
			次年度校内研選考（1月中）	
25	木	R5教育計画提出		
2	14	水	沖縄県到達度調査	
	27	火	実践の振り返り（校内発表）	全体
3	5	火	研究紀要作成	全体

8 研究組織



IV 研究の成果と課題

視点1：主体性と個性を生かした取り組みについて

視点2：自己肯定感を高める対話的活動の工夫について

【 成 果 】

- ①対話的活動を充実させる取り組みを行うことで、活動に対する安心感が生まれ、互いに協力した活動へと繋がった。
- ②認め合い褒め合う活動を行ったことで、成功体験や自信に繋がり、自分の良さや友だちの良さに改めて気づくことができた。
- ③身近にある郷土資料館や地域人材を活用した多様な体験的・探究的活動を行うことで、主体的に調べ学習を進めることができた。
- ④調べたことを自分なりの方法でまとめることで、達成感を味わわせることができた。
- ⑤地域の海を取り上げることで、身近な自然を大切にしようとする気持ちや、地域の行事や文化に関心を持つことができた。

【 課 題 】

- ①様々な体験活動を児童の探究心へ繋げる工夫
- ②児童がより自発的に活動できるような手立て
- ③児童一人一人が自信を持って表現する力の育成
- ④アウトプットをする場の設定

【アンケート結果】

- ①海洋教育を通じた地域素材や人材を生かした取り組みの充実が図られている。
肯定的回答 2021(60%) 2022(59.4%) 2023(95.7%)
- ②総合的な学習の時間では、地域のことについて学習を深め（相手に伝わるよう発表）
ています。 ※（ ）の内容は2023に追記
肯定的回答 2021(95.5%) 2022(96.8%) 2023(81.9%)